

- * 聖書の表す「義」とは、本来神の特質の一つで、「絶対的に正しい」という意味であり人間が持っているものではない。しかし、私たちが義でなくても神が義と認め宣言してくださる。それは、罪を赦すことと同じ意味である。何が義であり、何が義でないかを示した基準が「律法」である。「**律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、『むさぼってはならない』と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。』**」(ローマ7 : 7) 律法は「十戒」に集約されていて、その内容は主イエスが言われた通り「神を愛し」「隣人を愛す」ことに尽きる。マルティン・ルターは修道院の生活を励めば励むほど、自己の内面の邪悪さを見出して苦悩した。
- * 「これは、**律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。**」(ガラテヤ2 : 16) 神の目から見れば義人は一人もない。行いによっては救われない。ルターは修道院の書齋で聖書の研究を続け「塔の体験」といわれる発見をした。詩篇 22 篇にある「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか、,,,,」のみことばにより、明らかにキリストは身代わりとして人間の罪惡を一身に引き受けられたということがはっきりわかった。同時に、キリストは恐ろしい審判者ではなく、十字架は最も憐み深いことを示していることに気が付いたのである。そして、「神の義」という言葉は、「神は私たちを義としてくださる」という意味であることを新しく発見したのである。
- * 「義認」「罪の赦し」はただ信仰による。他に何も必要がない。イエス・キリストを信じる信仰のみで人は救われる。神は罪人であり、義となれない私たちを憐れんでイエス・キリストという助け舟を出してくださった。その船に乗りさえすればよい。天から梯子をおろしてくださった。そのイエス・キリストという梯子につかまりさえすればよい。良い行いをし、律法を守ったから罪が赦されるのではない。できない自分に降参する時、白旗を上げて主イエスに全部お任せする時に、神は助けてくださるのである。
- * そうすれば私たちは「神に生きる」ことができる。それは、「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。**」(ガラテヤ2 : 20) 自分が生きているのではなく、まるでキリストが私の中に生きておられるような生き方。なんと楽で安心な生き方であろうか。